

# 第46回「てのひら文庫賞」岐阜県読書感想文コンクール

## 最優秀賞・岐阜県教育委員会賞 作品

最優秀賞・  
岐阜県教育委員会賞

4年でのひら文庫部門／読んだ本・サリバン先生との出会い

### ヘレンとぼくの生きた言葉

岐阜市岐阜大学教育学部附属小中学校 後藤慈

ぼくには、姉と二人の弟がいる。友達からは、うらやましがられるけれど、ぼくは、一人っ子の方がよかった。友達にはゆるせることも、姉や弟たちには、ゆるせないことがある。そういう時は、決まってけんかになり、ぼくはおこって、物に当たってしまう。少しすっきりするけれど、後から、やらなければよかったと後かいる。

『サリバン先生との出会い』を読んで、ヘレンⅡケラーもぼくと同じでかんしゃくを起こすと知った。ヘレンは、一才の時の病気のせいで、目が見えず、耳も聞こえなくなり、話すこともわすれてしまった。ぼくは、ヘレンの世界を少し体けんしてみたくて、目をつぶってご飯を食べてみたけれど、全ぜんおいしくなかった。音のない暗やみの世界は、楽しくなく、ぼくにはたえられなかった。そんな世界にいれば、自分の気持ちをじょうずに相手に伝えられないのは当たり前だと思ふ。

ヘレンが七才の時、家庭教師としてサリバン先生がやってきた。サリバン先生は、手に文字をつづって、言葉を数えた。けれど、ヘレンは、理かいできずに、かんしゃくを起こして、先生がくれた人形をこわしてしまった。ヘレンは、暗やみの世界にいる自分に思いやりの心などあるはずがないと思つていたから、人形をこわしても悪いと思わなかった。

でも、自分の手に流れるつめたいものが、手のひらの水という文字とむすびついた時、ヘレンはかわった。この生きた一言が暗やみにいるヘレンの光やきぼう、よろこびになり、新しい心ですべてを見るようになった。だから、自分でこわした人形のことを思い出して、生まれて初めて後かいと悲しみをけいけんした。ヘレンは、いろいろな言葉と同時に、いろいろな感じようも手に入れた。

ぼくは、この生きた一言つて何だろつと何度も考えた。ぼくのたんになの先生は、教

育心理の先生だ。ぼくは、先生のじゅ業が大すきだ。例えば、自分の気持ちを表じようや、言葉でどう伝えるか、どうしたら相手をきずつけずに、自分の意けんをうまく伝えられるかをクラスで考えた。それまでのぼくは、弟の気持ちなんか考えずに、イライラをぶつけていた。でも、心のじゅ業で、学んでから、相手の気持ちも大切にして言葉を選ぶようになった。すると、前より弟のえ顔がふえた。

ぼくにとつての生きた言葉は、相手と自分の思いを大切にして伝えることだと思ふ。ヘレンの世界は、かわらず暗やみの世界だけど、生きた一言はヘレンを幸福な子と思わせた。ぼくは、前までは、一人っ子の世界にあこがれていた。でも、じゅ業で学んだことを実せんして、それが生きた言葉になって、夏休みでも毎日、家の中に遊び相手がいるぼくは幸せなんだと気づいた。幸せは身近にあるとヘレンに教えてもらった。

※無断での転用・転載を禁じます。